

研究ノート

セク融・学融を妨げる要因の検討と構造構成主義 による解決の可能性とその適用範囲¹⁾

荒川 歩²⁾・サトウタツヤ³⁾

Hindrance of trans -sector or trans -disciplinary communication and its resolution using structural -constructivism

ARAKAWA Ayumu, SATO Tatsuya

With the increase in field psychology, psychologists have more opportunities to communicate with a man of deeds (trans - sector) or researchers from other disciplines (trans - disciplinary). However, researchers find it difficult to talk about their research with practitioners or other researchers for several reasons, including differences in (1) the amount of theory, (2) the power structure, (3) goals across sectors (publish research or solve clinical problems), (4) accountability, (5) perspective (internal or external), and (6) attitudes to communication. To overcome these difficulties, we suggest using structural - constructivism (Saijo, 2005) and devising “alternative stories”. Structural - constructivism is a theory that solves conflicts between disciplines by combining each researcher’s interests and assertions. An “alternative story” is a method that combines several assertions into narrative stories. Although structural - constructivism is needed to consider the opinions of other sectors, it is also a useful theory for trans - sector or trans - disciplinary communication.

Key words : trans - sector, trans - discipline, structural - constructivism, alternative story

キーワード : セク融・学融・構造構成主義・オルタナティブ物語り

実験という手法を整備することによって近代化を果たした心理学には、その当時から、生活の場における人間のあり方や実践との関わりを強調する動向が存在し続けた。心理学の父とされるヴントが「実験心理学」と「文化心理学」を心理学の両輪として構想していたことはよく

知られた事実となっているし、ジェームズ、ソーンダイク、ヴィゴツキー、レヴィンといった人たちがそれぞれの立場からそうした志向を表明している。また、ワトソンやスキナーといった行動主義者たちが行動療法や行動形成といった実践的なことに関心をもちつづけてきたということもある。

ところが、こうした志向が常に主流になりえないということもまた一面の事実を表しており、Cronbach (1957)やBaer, Wolf, & Risley

1) 本研究は、日本学術振興会：人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業「ボトムアップ人間関係論」の構築プロジェクトの援助を受けた。

2) 立命館大学人間科学研究所

3) 立命館大学文学部

(1968)などが、教育心理学や行動分析の領域で「心理学と現実問題」について議論を行っているのである⁴⁾。もとより日本でもこうした動きがなかったわけではない。だが、近年の特徴として、「現場、フィールド」といった言葉によって心理学と現実との接点を求める流れが、心理学の中でひとつの大きな流れとなりつつある(e.g. やまだ・サトウ・南, 2001; 山本・伊藤, 2004)。また、このような志向は心理学という学問に限らず、他の分野でも起きている。学問でいえばタコツボ化の打破、組織で言えば縦割り弊害の打破、ということが言われてきている。こうした状況に伴い、研究者が現場の実践者や研究協力者と研究に関してコミュニケーションをすることが必要となっている。では、研究者と実践者・研究協力者とのコミュニケーションはどのようになっているのであろうか？

セク融・学融とは何か？

学問の世界の中では、異なる学範が共同に研究することを学際研究と称しており、その試みは決して少なくなかった。しかし、学際研究に成果があったのだろうか、ということが問題にされつつもある。それぞれの学範の視点でそれぞれ個別の結果を導きだしそれを列挙するだけで終わることが多いのではないのか、ということである。サトウ(2001)、佐藤(2002)は、Gibbonsら(1998)のモード論を引用して、モード(社会関心駆動型)の知識生産の必要性を論じてきた。そして、このようなモード型の知識生産においては、学際研究ではなく、学範間の敷居を取り去り共通の解を求める「学融」(trans-disciplinary)的研究が必要であると指摘している。

4) この点については、覆面の査読者の先生から示唆をいただいた。査読者の先生にこの場を借りて心から感謝いたします。

サトウによる一連の議論は、心理学という学範内部ではあるが、一定の理論的成果をあげており、同時進行的にモード論に関心をよせている他の学範の研究者からも注目を集めることとなった。しかし、この議論では学範間の融合ということが強調されており、モード論が考える意味での学問と社会の関係が十全に議論されてきたとは言い難い。モード(社会関心駆動型)と言った時の「社会」には他の学問分野も含まれることは言うまでもないが、一般的に社会との関係と言った場合には、学問以外のパートナー、産、官、その他NPO法人などが想定されるべきであろう。

サトウ(2004)は、産・官・学など異なる目的を持った人を、異なるセクターにおけるアクターとして説明し、セクター間の融合の必要性を指摘した。この融合のことをサトウは「セク融」(trans-sector)と呼んでいる。そこで、本論では、セク融を中心に論じ、必要に応じて学融についても言及することにする。

本論文の目的と構成

以下では、まず現場でのセク融の必要性とその場合の障害となる点を指摘する。学融を目指す活動において、研究者の融合的活動の障害となるのは、それぞれの研究者がそれまでにうけてきた教育や訓練の違いであり、その教育や訓練によって血肉化した個々のパラダイムの研究方略の違いである。一方、セク融では受けてきた教育の違いに加えて、セクター間の目標の違い(論文執筆目的か現場での問題解決目的か、など)や現場での責任の重さの違いなどが融合への障害となるだろう。

続いて、西條(2003a)が、学問間の認識のズレを解消するツールとして提唱した構造構成主義を紹介し、セク融に構造構成主義を持ち込むことの利点と適用可能範囲を指摘する。

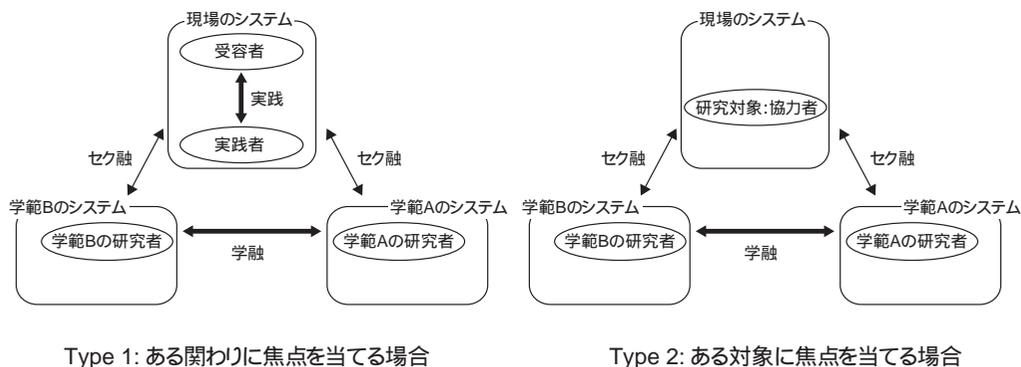


Figure 1 研究者と現場の関わりの模式図

なお、下山（1997）は、実践研究を実践と研究を別の人物が行う「実践についての研究」と実践者が研究者も兼ねる「実践を通しての研究」に分類している。本論では、研究者と実践者が異なるセクターに属する場合のコミュニケーションについても検討を行うために「実践についての研究」に焦点を当てる。

フィールド 現場心理学の隆盛と研究者と実践者・ 研究協力者のセク融の必要性

近年の現場研究の隆盛を考える上で重要なメルクマールのひとつは「現場心理学の発想」（やまだ，1997）であり、さらに言えばこの書に再録された「モデル構成を目指す現場心理学の方法論」が1986年に世に出たことである。この紀要論文からおよそ20年かけて、日本の心理学界に現場ということが違和感なく取り込まれる事になってきたのである。「現場心理学の発想」の帯には「実験室を出て、現場の生き

生きした感触に触れ、多層性や矛盾を抱え込み、働きかけ、育みつつ知る認識のしかた。現場心理学の発想は、知の方法の変革を根底から問いかける。」という文言がある。ここに確かに認められるように、当初、現場心理学は、現場における何かを記述することによって実験室での心理学にはないなにかを得るための試みであった。しかし、「現場心理学の発想」の発刊それ自体がこうした状況を大きく変化させる力となった。現在、現場で研究を行う研究者の多くが、現場に起こることを単に記述し、研究対象とするだけにとどまらず、その現場の中で、または研究協力者との関係の中でなんらかの役割を担わざるをえない必要性を感じている。たとえば2002年、第14回発達心理学会で行われた自主シンポジウムの「現場（フィールド）の狭間で「もたえる自己」⁵⁾というタイトルには、現場において研究協力者から求められる役割と研究者としての役割の間で何らかの葛藤がおこり苦悩するということが表れている。また、鹿毛（2002）は、参加型アクションリサーチという概念を提唱し、現場で、人間の行為を理解し、必要に応じて変化を促すことの重要性を指摘している。

では、現場において研究者はどのような役割の人と関わるのであろうか。Figure 1は、現場において研究者と関わると考えられる人と研究

5) 日本発達心理学会第14回大会，自主シンポジウム（2002年3月27日）「現場（フィールド）の狭間で「もたえる自己」」企画・司会：本山方子（奈良女子大学）／企画：上淵寿（東京学芸大学），磯村陸子（お茶の水女子大学大学院）／話題提供：掘越紀香（大分大学），松嶋秀明（名古屋大学大学院），野坂祐子（お茶の水女子大学大学院），矢守克也（奈良大学）／指定討論：森岡正芳（奈良女子大学）

者の関係を整理したものである。ここでは、ある種のシステムの中で起こることを研究する場合 (Type 1) とある特定の対象者を協力者として研究をする場合 (Type 2) で2種類に分けた。Type1の研究において「受容者」とは、学校による児童・生徒・学生など現場のシステムにおいてサービスの受容者を指す。また「実践者」とは、学校における教師、幼稚園における保育者などを指す。「実践者」は、研究者とは異なる学範において教育を受けた専門家である点と、現場において責任を負っている点、研究よりもその場で問題解決が目標になっている点で研究者とは異なる。サトウ (2004) の定義にならえば、実践者は研究者とは異なるセクターに属するアクターであるといえよう。この点はType2の研究における「研究対象=協力者」の場合も同様である。

現場において出会う可能性のあるもう1種類のタイプは他領域の研究者である。他領域の研究者は、類似したセクターに属しているが異なる学範において教育を受けたアクターである。

心理学者が現場で経験するセク融にはどのようなものがあり得るだろうか。

現場における研究者の役割を考える上で、まず「現場からの要請」の有無と「実践や協力者への援助に対する志向性」の有無という2本の補助線を引いて考えたい。「現場からの要請」があつて「実践や協力者への援助に対する志向性」もあつた場合には、セク融が必要となる。他方、「現場からの要請」があつても「実践や協力者への援助に対する志向性」がなければ一方的な結果通告型のコミュニケーションになる。

逆に、「現場からの要請」がなく (研究者が自分の研究を行うことを目的として入る場合や、非研究者として入っている現場で研究者として研究を開始する場合)、かつ「実践や協力者への援助に対する志向性」がない場合もありうるであろう。たとえこのような場合であつて

も倫理的理由 (箕浦, 1999, p37) や研究の信用性を確保する理由 (Lincoln & Guba, 1985) から「研究成果」を研究協力者に報告することが必要だとされている。しかし、実際にはWagner (1981, p7) が指摘するように「研究成果」を読んだインフォーマンツ (= 情報提供者・協力者のこと) が、自分の思い描いている世界とその「研究成果」に書かれた世界との間のギャップにショックを受ける「フィールドワーカー・ショック」が起こり、この「報告」がうまくいくとは限らない。

「現場からの要請」がないにも関わらず「実践や協力者への援助に対する志向性」を研究者が持っている場合には、より問題は複雑であり、自分の研究をなんとか実践や協力者への援助に生かしたいと思えば、さらにセク融は困難であろう。この最後の「現場からの要請なし」になんらかの「実践や協力者への援助に対する志向性」を持って入る研究者が増えていること (e.g. 堀越, 2002) から、早急にこのコミュニケーションの方法論を確立する必要があるといえよう。

学融に関しても同様に、異なる学範の研究者が、問題解決のために同じフィールドに入り、答えを探る事態は今後増えてくると考えられる。単にそれぞれの立場から発言するだけではなく共同して問題解決にあたるために学融が求められる。

モード論では、研究と実践という語の使用が上下関係を生み出しかねないとして、知識生産と呼ぶように提唱していた。いわゆる研究知はモードの知識生産、実践知はモードの知識生産、という具合である。ところが、モードを志向して異なるセクターの人たちと協同で活動する場合には、今見てきたように、「知識」をめぐるコミュニケーションのズレが起きてしまうのかもしれないのである。

セク融・学融についての科学技術社会論的 アプローチ

さて、このような「知識」をめぐるコミュニケーションについては科学技術社会論の文脈で論じられてきた。ここでは、学融・セク融それぞれについて科学技術社会論の立場から報告された研究を紹介する。

学融において起こる問題点については、学範の違いによって生じるコミュニケーションギャップの問題として藤垣(1995, 1999)が検討を行っている。藤垣(1995, 1999)は、学範間でコミュニケーション障害が起こる理由として「妥当性境界」(方法的・内容的にどのような研究がその分野で意味を持ち、どのような研究が意味を持たないかの境界)が学範によって異なる「共役不可能性」の問題をあげている。

この「妥当性境界」という概念の背景には、客観的な事実というものが社会的に作られたものであるという社会構成主義の影響がある。社会構成主義的な立場では、事実は予め存在しているのではなく、それを観察するものの視点に依存して出現するものであると考えられている(Gergen, 1998, p272)。社会構成主義に基づくなら、対象はさまざまな視線を惹きつける契機の可能性(何が契機になるかもそれを観察する主体によって異なると考えられる)に過ぎない。また、科学論の中でも「客観的な事実」とは解釈と独立して存在するわけではなく、常に「誰」が「どのように」観察したのかを伴った形でしか存在しないこと(理論的負荷性)が指摘されている(Hanson, 1958)。このようなことを背景として、何が「客観的な事実」であるかは、実質的には学範内の学術誌を中心としたジャーナル共同体(藤垣, 2003)によって決定され、どのような方法で行われた何についての研究が学範の中で意味のある「客観的な事実」として認定されたかの累積が後付け的に「妥当性境界」

として認識されようとしている。

さて、学範間の「共役不可能性」の問題の解決策として実際に取られている方法には3種類の方法があると藤垣は指摘する。1種類目は「統合」であり、妥当性境界そのものの統合であり、たとえば新たな学際学会の設立を例としてあげている。2種類目は「引用」関係の相互交流であり、ストレス科学における疫学研究の知見が生体物質を単位とした研究分野の新しいパラダイムとなることを例としてあげている。3種類目は妥当性境界とその適用範囲および結果を一つの表にまとめて後続の研究に提示することであるとしている。これら藤垣の提示した解決策は個々の問題の学融的解決というよりもアカデミックシステムとしての解決策であり、実際に二人の研究者が向かい合ったときにできるものではない。

研究者と非研究者とのセク融については、科学技術社会論の中でも科学コミュニケーションの分野で研究がなされている。林は「市民は知識が欠如しているので、むずかしい科学を理解することはできず、その判断は間違っているので、正しい知識をわかりやすく伝えることが公衆の科学理解のために不可欠だ」(2004, pp314)とする考え方を「欠如モデル」と定義し、現在の日本においても根強く残っていることを指摘している。サトウは官公庁の安全・安心にまつわるリスクコミュニケーションを目標としたHPの言葉の使い方を分析し、コミュニケーションを目的としたHPにおいてさえも「欠如モデル」的思考がその背景にあることを指摘している(サトウ, 2005)。専門家は科学的客観的に安全を語るが、非専門家は素人として情緒的主観的に安心を語るという分析は、専門家の優位性を言外におわせてしまっている。

欠如モデルに対しては批判もあり、多くの研究者(e.g. Gregory & Miller, 1998; 杉山, 2002; 小林, 2002; 林, 2004)が、非研究者は研究者とは

異なる形の知識を持った専門家であると指摘している。そのような非研究者と研究者のコミュニケーションの方法について杉山(2002)は、「信頼」を構築し保持することが重要であると指摘し、小林(2002)は「コンセンサス会議」という手法を紹介している。小林(2002)によると「コンセンサス会議」は、主に、運営委員会の組織、市民(当該の分野の非専門家)パネルの公募と人選、専門家パネルの構成、市民パネル同士が議論し「鍵となる質問」を決定、コンセンサス会議本番、市民パネルだけが集まって「コンセンサス文書」を作成するといった要素を含んでいる。重要なのはこの本番で、市民パネルの質問に対して専門家パネルが回答するという方法が繰り返される点であり、最終的に「コンセンサス文書」を作成するのは市民である点である。小林(2002)は、研究者にとっては非研究者が持っている「地域知」(Geertz, 1983)を学習する場であり、非研究者にとっては「地域知」を生かす場であると位置づけている。

以上、ここでは、科学技術社会論の立場でなされた研究を紹介した。これらは重要な示唆を与えるものであるが学範としての存在形態を問う大規模なものとなっており、個別のコミュニケーションについては十分な検討が行われていないように思われる。そこで、本研究ではこれらの研究を踏まえて、学範全体という大きなものではなく、研究者と非研究者の個別の関わりに焦点を当てる。

研究者と実践者・対象者とのセク融に 固有の障害

研究者と実践者・対象者間のセク融において、先ほど述べた「理論的負荷性」の違いに加えて、「権力関係の違い」、「セクター間での目標(研究目的か現場での問題解決目的か)の違

い」、「セクター間での責任の重さの違い」、および「視点(内部からの視点か外部からの視点か)の問題」や「コミュニケーションの考え方」の5点が大きな障害となると考えられる。

権力関係の違いに関して、志水(2002)は、学校臨床的研究における研究者の役割を、特定の問題解決に当たる「セラピスト」型、専門的知識を持ってアドバイスをする「コンサルタント」型・対等に実践にあたる「コラボレーター」型・研究者が実践者に対する情報提供者になる「インフォーマント」型・院生などがお手伝いとして入る「ボランティア」型の5種類に類型化している。志水の指摘するように、「セラピスト」型や「コンサルタント」型、「ボランティア」型は、研究者と実践者の間にある種の権力関係が生じ、「セラピスト」型や「コンサルタント」型では研究者側が実践者に対して大きな力を持つ可能性が高く、逆に、「ボランティア」型では、実践者の方が研究者よりも権力を持つ場合がある。このような権力関係が強いとき、科学コミュニケーションは、権力的に低い立場にあるものは、強い立場のものにとって、当然持っているべき知識のない知識の「欠如モデル」になり、セク融にはならない。

2番目と3番目の問題は、「セクター間での目標の違い」および「責任の重さの違い」である。現場において、実践者は現場のシステムを維持し、様々な問題を解決することが目標であり、その責任を負っている。それに対して、特に「一時的ストレンジャー」(秋田・市川, 2001)として現場に入る研究者の目標は自身の研究であり、たとえ現場で起こっている問題の解決を志したとしてもその責任を負うのは研究者ではなく実践者である。このずれが、研究者=実践者で、知識についての十分なコミュニケーションが行われることを障害すると考えられる。

4番目の問題は、視点(内部からの視点か外部からの視点か)である。宮崎(1998)は実践

者に対する研究者の役割について論じ、研究者は実践者に対して「原理ではなく視点」を提供するもの、あるいは「思考のための食料」を与えるものとして研究者の役割を定義し、このような役割の研究者を「スティミュレーター(刺激者)」と呼んだ。しかし、特に、「ボランティア」型や「一時的・継続的ストレンジャー」として要請なしに研究者がフィールドに入った場合には研究者が提示する視点は実践者・研究協力を傷つけるばかりで役に立たないことも多いと考えられる。たとえば、親身に世話をしてくれていた研究協力者に研究報告書を読んでもらったところ裏切られたと抗議された、と志水(2001)は告白している。

この理由の1つとしては、特にエスノグラフィ的な視点でかかれた研究の場合、研究者と実践者が視点を共有していない点にあり、実践者の内部世界が尊重されず、あくまで研究者の世界観に基づいて描かれている点にあると考えられる。

従来のエスノグラフィにおいては当事者から感情的な反応を引き出すことが本質的な部分を描いたエスノグラフィとして評価される一つの要因であった。これはエスノグラフィとしては重要なことかもしれないが、それをそのまま協力者にしめすことは好ましくないといえる。少なくとも実践者・協力者の行動を変えるには、実践者・協力者の内在的な世界を尊重し、内在的な世界の言葉で語るが必要になる。

松嶋(2002)は、更生保護施設でのフィールドワークにおける自身の視点の変化を検討している。その中で、フィールドエントリーの当初は少年側の視点に立っていたのに対し、経験をつむ中で、指導者側の立場も理解できるようになり、同時に研究者として現場の人から意見を求められるようになっていったことを報告している。

実践者・協力者の内在的世界を完全に取得す

るのは困難であるが、その一つの技法として杉浦(2003, 2004)の「説得・納得ゲーム」が有用であるかもしれない。

セク融における5つ目の問題として、コミュニケーションの考え方が挙げられる。林(2003)は「科学報道の役割についての“気づき”」として4段階をあげている。1段階目は「科学記者は科学を正しく伝えているか」、2段階目は「科学記者は科学をわかりやすく、あるいは楽しく伝えているか」、3段階目は「科学記者は批判精神や自律性を持つべきだ」、そして4段階目は「科学を育むのが科学記者の役割だ」としている。これは科学報道に関して述べられたものであるが、研究者と非研究者のコミュニケーションにおいても当てはまる部分大きい。正しく伝えることを超えて、わかりやすく、楽しく伝える技術を研究者も身につける必要がある。

セク融・学融の構造を考えるツールとしての 構造構成主義とその利点

構造構成主義は、西條(2003a, 2003b, 2004, 2005)によって学問間の対立を解消するために開発された認識論の一種である。その源流には、構造主義科学論(池田, 1990)や、竹田(1994)がニーチェの『権力への意志』に関して指摘した「欲望相関性」(西條は「関心相関性」と呼んで概念を拡張している)がある。

西條は、研究者間での不要な摩擦が起こる原因の一つとして客観的・絶対的な「外部存在」の存在を前提として議論していることをあげ、「存在や意味や価値は主体の身体・欲望・関心と相関的に規定される」(竹田, 1995)ことを認識する必要を論じた。また、議論している双方が自分の視点の正当性を繰り返すだけでなく、相手の関心から見ることによって自分の視点を相対化する必要を強調している。これが構造構成主義の基本思想である。

学範囲・セクター間のコミュニケーションにおいて、一つの大きな障害となるのは、理論的負荷性であろう。たしかに理論は私たちに現象の見方を提示してくれる。たとえば近年の物理学の進歩は 2003年にノーベル賞を受賞した小柴博士の研究を例に出すまでもなく、理論こそが現象の見方を指し示すのであり、理論が観察（観測）装置や観察（観測）方法を規定している面がある。しかしこのことは逆に言うと、理論は他の見方を拒む見方を常に提示していることでもあり、異なる学範の研究者の相互理解を妨げる原因の1つとなりうるのである。ここでは、異なる学範囲・セクター間のコミュニケーションにおける理論的負荷性と学融・セク融を分数にたとえて説明してみよう。異なる学問は、分母の異なる分数だとする。1/3（たとえば心理学）と1/5（たとえば教育学（異なる学範）または教師（異なるセクター）はそのままでは、お互いの視点を100パーセント理解できない。相互に理解するためには、通分（相手の視点で自分の視点を相対化する行為）を行い、最小公倍数である15でそれぞれを再文脈化する。この行為によって、1/3（たとえば心理学）は、自分の視点が相対的に見れば5/15であることに、1/5（たとえば教育学）は、自分の視点が相対的に見れば3/15であることに気づくであろう。構造構成主義が目標としているのはこのように表現できると思われる。

また、西條の構造構成主義はさらに3つのことを示唆している。まず1つ目の示唆は、研究者が普段自分の学範の中で自らの「身体・欲望・関心」に意識的ではないことである。1/3は、1/5に出会わなければ自分の関心が相対的にどのようなものであるかについて気づかなかったであろう。また、5/15, 3/15になることで、それぞれの元の分母（＝理論的負荷性）では気づかなかった、4/15や1/15という分節の可能性に気づく可能性も含んでいる。

西條的な構造構成主義による2つ目の示唆は、研究者が知っている「真実」を実践者・協力者に伝えるだけではコミュニケーションは成立せず、実践者・協力者の視点を自分の中に取り込むことが必要とされること、つまり、研究者自身も変わる必要があることである。

3つ目の示唆は、『「何が」または「どちらが」正しいか』よりも、『どうすればお互いに満足する結果が得られるか』が重要である点である。ここでは、満足すれば正しくなくても良いのか？という問いにどう答えるかが問題となる。ここでの正しさとは「絶対的真理」のようなものではない。たとえば、教育学者も心理学者も満足したけれど、クラスの全員の学力が下がり、1/3が不登校になった、というような場合である。これは構造構成主義のローカル性の問題であり、後述する。

これらの点により、構造構成主義はセク融・学融を考える上で1つの視点を与えらる。

セク融・学融の構造を考えるツールとしての構造構成主義の具体的な過程とナラティブ・ベイスド・メディスンおよびオルタナティブ物語り

西條（2005）においても構造構成主義の具体的な応用例が紹介されているが、齋藤（2003）がナラティブ・ベイスド・メディスン（以下NBM）が構造構成主義とよく似た構造をもっている点を指摘しており、また具体的なNBMの手順をモデル化していることから、本論ではそれを紹介する。NBMとは、統計的な根拠を元に医療方針を決定するEBM（エビデント・ベイスド・メディスン）に対して用いられる言葉であり、当事者（クライアント）と研究者（医者）が当事者の視点（ナラティブ）を尊重する中で共通の解を探そうとする技法である。その意味でこのNBMもセク融における実践者

（当事者）- 研究者関係と類似していると思われる。

齋藤（2003）はNBMのプロセスとして、(1)「患者の病いの体験の物語り」の聴取プロセス、(2)「患者の物語りについての物語り」共有プロセス、(3)「医師の物語り」の進展プロセス、(4)『物語りのすり合わせと新しい物語りの浮上』のプロセス、(5)ここまでの医療の評価のプロセス、の5つのプロセスを指摘している。これをセク融に置き換えるなら、以下のようなプロセスになるであろう。

第1段階として「実践者（異なる学範の研究者）の現場についての語り」の聴取プロセス、第2段階として「実践者（異なる学範の研究者）の物語りについての物語り」共有プロセス、第3段階として「研究者の物語り」の進展プロセス、第4段階として『物語りのすり合わせと新しい物語りの浮上』のプロセス、第5段階として、ここまでの学融・セク融の評価のプロセスである。

ここで、一つの問題となるのが、『物語りのすり合わせと新しい物語りの浮上』のプロセスであろう。この実際の例として本論では齋藤自身が用いている例と湧井による研究を例として取り上げる。

まずは、齋藤（2004）の「物語りのすり合わせ」過程を齋藤（2003; 2004, pp149-161）で口腔内灼熱症候群であると診断されたある患者の例を紹介する。この患者は、口腔内に痛みを訴えてさまざまな医者にかかったが器質的な異常が認められなかったために「不定愁訴」であるとされたり「奇妙な患者」として扱われたりしていた。齋藤のもとを訪れたのはそのような状

況にあったときであった。最初の面接後、齋藤は「どのような診断物語りを、患者（Rさん）と医師（筆者）が共有しうるのか？」という問いを立て、その答えとして患者の主観を否定しない「口腔内灼熱症候群」という病名とそれが特殊な病気ではなく比較的よく起こる病気であるというエビデンスを物語りとして採用することにした。患者との再面接場面において、その物語りを齋藤が患者に語ったところ、患者とこの物語りを共有することが出来、この病気は何かの薬によってすぐに全治するものではなくうまく付き合っていくことが必要であることという齋藤の説明は受け入れられた。その後、数回の面接を経て、患者の状態に改善が認められたと齋藤は報告している。

この例は以下のように整理することが可能である。

患者の主観による「事実」物語り：口腔内に違和感がある。

医学的「事実」物語り：口腔内に器質的な異常は認められない。

齋藤と患者によってすり合わせられたオルタナティブな物語り：患者は口腔内灼熱症候群（口腔内の慢性的違和感の訴える患者についてつけられた病名であり、非常に頻度の高い病気）であり、何かの薬によってすぐに全治するものではなく、うまく付き合っていくことが必要である。

ここで、相互の物語りの限界の同定（どこまでについての何の物語りか？）と、患者の主観的な物語りの受容、そして双方の物語りが矛盾しない結びつく第3の物語りの生成が行われていることがわかる。

NBMではないが、湧井による報告⁶⁾も「物語りのすり合わせ」に示唆を与える。湧井は、

6) 2004年12月15日に立命館大学で行われたオルタナティブ・オブション研究分科会（日本学術振興会 人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業 「ボトムアップ人間関係論」の構築プロジェクト）での「物語をずらしつつ、引き受ける『性同一性障害者』という語り」の発表に基づく。

自己認識が男性であるにもかかわらず生物学的性が女性である人物の自己物語の変遷について論じ、社会から要請される「自分は女性である」という物語と実際に自分が感じている「自分は男性である」という物語、そして両者の矛盾がある程度解消する「自分はレズビアンである」という物語のどれをも完全には受容しきれずに悩んでいたその人物が「自分はGID (gender identity disorder) である」というオルタナティブな物語を知って納得する時期があったことを指摘している。

この例は以下のように整理することが可能である。

当事者の主観による「事実」物語り：僕は男性である。

第三者から見た生物学的「事実」物語り：あなたは生物学的には女性である。

オルタナティブな物語り：「僕はGIDであり、だから生物学的には女性である」

この「自分はGIDである」というオルタナティブ・ストーリーの特色は、人からは女性として見られ生物学的にも女性である、という事実と、自分は主観的には男性である、という事実をどちらも否定せずに矛盾せずにつなぎあわせるものであった。

以上、2つの例で示したように、セクター間のコミュニケーションにおいてはどちらの視点も一つの視点として受け入れた上で、そのどちらをも否定はしないオルタナティブな物語りを作ることが必要であることが示唆される。

構造構成主義をセク融・学融を考える

ツールとしての適用可能な範囲

構造構成主義という視点がセク融・学融にお

いて有効なことを指摘してきた。しかし、実際に応用するのに適切な範囲と不適切な範囲がある。ここでは2つの適用上の注意点について指摘を行う。

1つ目の適用上の注意点は、先述した、問いと答えのローカル性である。構造構成主義では「関心」を相互に取り込む形で自らを相対化するが、そのような相対化はその対話者同士のローカルな関係においてなされるに過ぎない。たとえば、先の例で、1/3と1/5が相互に構造構成主義によって3/15と5/15になったとしても、1/4という理論的負荷性をもった人が現れた場合には、また改めて相互に「関心」を導き出す必要がある。絶対的な「外部存在」を規定せず、その場全員が納得できる「答え」を探ることが利点である構造構成主義において、そこで得られる成果が、その問題に関わっている人々の間の非常にローカルな成果であることは避けられない。たとえば、先述のように、教育学者と心理学者が納得する問いと解であったとしても、それを学校教育に適用した場合に、児童や家族、関連業者、付近の住民など他のセクターが納得するとは限らない。そのため、常に外部者に門戸を開き続け、議論の場を作ることが構造構成主義をセク融・学融に応用する上で必要な点であるといえよう。

2つ目は同じ内容についての利害の相違には適用が困難である点である。オルタナティブ物語を用いた技法では、両者の物語の範囲を調整し、お互いが語っていない部分に相互の物語りを埋め込むことでオルタナティブ物語りを作るが、完全に同じ範囲についての語りが異なっているとオルタナティブ物語りを作ることができない。例えるならば、一つしか移植可能な臓器が無いのに、同時に同じ部位を移植することが必要な患者が二人いたならば、Aさんに移植するという物語りとBさんに移植するという物語りのほかに、両方ともに移植するという物語り

は創造できないのと同様である。もしこれが、部位がずれていたり、時期がずれていたりしたならば、両者が満足する物語りを作ることが可能となる可能性がある。先述の性をめぐる語りの例で述べるならば、もし2つの相反する語りが「Aさんが生物学的に男性である」という語りと「Aさんは生物学的に女性である」という語りであったならば、完全に同じ範囲についての語りが異なっていることになり、オルタナティブな物語りを導出することはできない。これと同様に、セク融・学融において構造構成主義やオルタナティブ物語りを適用するには、二者の主張がねじれの位置にあることが必要とされる。

本研究のまとめと今後の課題

今後、現場研究が増えるにつれ、学融よりはセク融の必要性が高まっていくであろう。そのようなセク融の経験を個人的な技術ではなく、共有可能なものとして残していくことが必要であると考えられる。本論ではセク融で起こると思われる問題点を指摘し、その問題を考えるツールとして構造構成主義を検討し、その具体的なプロセスについて検討した。ただし、本論で行った提言に対しても現場での実践に基づいた改良が望まれる。

文献

- 秋田喜代美・市川伸一 2001 教育・発達における実践研究 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦(編)心理学研究法入門 (pp. 153-190) 東京: 東京大学出版会.
- Baer, D. N., Wolf, M. M., & Risley, T. R. 1968 Some current dimensions of applied behavior analysis. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 1, 91-97.
- Cronbach, L. J. 1957 The two disciplines of scientific psychology. *American Psychologist*, 12, 671-684. <http://psychclassics.yorku.ca/Cronbach/ Disciplines/> (2005年2月15日確認)
- 藤垣裕子 1995 学際研究遂行の障害と知識の統合 異分野コミュニケーション障害を中心として 研究技術計画 10, 73-83.
- 藤垣裕子 1999 ジャーナリズムシステムからとらえる科学のダイナミズム: 計測と認識論をつなぎ、異分野摩擦を超えるには 岡田猛・田村均・戸田山和久・三輪和久(編) 科学を考える: 人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点 (pp.186-211.) 京都: 北大路書房
- 藤垣裕子 2003 専門知と公共性: 科学技術社会論の構築へ向けて 東京: 東京大学出版
- Geertz, C. 1991 梶原景昭・小泉潤二・山下晋司・山下淑美(訳) ローカル・ノレッジ: 解釈人類学論集 東京: 岩波書店 (Geertz, C. 1983 *Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology*. Basic Books)
- Gergen, K. J. 1998 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀(訳) もう一つの社会心理学: 社会行動学の転換に向けて. ナカニシヤ出版. (Gergen, K. J. 1994 *Toward transformation in social knowledge 2nd ed.* London: Sage.)
- Gibbons, M., Limoges, C., Nowotny, H., Schwartzman, S., Scott, P., & Trow, M. 1994 *The new production of knowledge: The dynamics of science and research in contemporary societies*. Sage.
- Gregory, J., & Miller, S. 1998 *Science in Public: communication, culture, and credibility*. New York: Plenum Trade.
- Hanson, N.R. 1958 *Patterns of discovery*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 林衛 2003 科学報道は『わかりやすく』から『魅力的に』 市民も科学者も目が離せなくなる記事を 新聞研究, 622, 30-34.
- 林衛 2004 科学研究のためのインフォーマル・コミュニケーション 情報の科学と技術 54, 311-316.
- 池田清彦 1990 構造主義科学論の冒険 東京: 毎日新聞社
- 堀越紀香 2002 「役に立つ」ことにこだわる私へのこだわり 新しいフィールドにおける輻輳的立場への動揺 *Inter-Field*, 3, 6-16.
- 鹿毛雅治 2002 フィールドに関わる「研究者/私」: 実践心理学の可能性 下山・子安(編) 「心理学の新しいかたち」 誠信書房 pp132-171.
- 小林傳司 2002 科学コミュニケーション 専門

- 家と素人の対話は可能か 金森修・中島秀人
(編) 科学論の現在 (pp117-147) 東京: 勁草
書房
- Lincoln, Y. S., & Guba, E. G. 1985 *Naturalistic inquiry*.
Beverly Hills, California: Sage Publications.
- 松嶋秀明 2002 観察者の「私」の物語りの構成:
自身のフィールドワーク過程の再検討 名古屋
大学教育発達科学研究科紀要, 49, 17-29.
- 箕浦康子 1999 フィールドワークの技法と実際:
マイクロ・エスノグラフィ入門 東京: ミネル
ヴァ書房
- 西條剛央 2003a 人間科学の再構築: 人間科学的
コラボレーションの方法論と人間科学の哲学
ヒューマンサイエンス リサーチ, 12, 133-145.
- 西條剛央 2003b 「構造構成的質的心理学」の構築
質的心理学研究, 2, 164-186.
- 西條剛央 2004 構造構成主義の認識力 現代のエ
スプリ, 441, 206-213
- 西條剛央 2005 構造構成主義とは何か? 京都: 北
大路書房
- 斎藤清二・岸本寛史 2003 ナラティブ・ベイス
ト・メディスンの実践 東京: 金剛出版
- 斎藤清二 2004 ナラティブ・ベイスト・メディス
ン 医学と人間科学のコラボレーション 学
術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリ
ーズ (立命館大学) 7, 72-107.
- サトウタツヤ 2001 モード論: その意義と対人援
助科学領域への拡張 立命館人間科学研究, 2,
3-9.
- 佐藤達哉 2002 モード・現場心理学・質的研
究; 心理学や教育学にとっての起爆剤 下山・
子安 (編) 「心理学の新しいかたち」 誠信書
房 pp173-212.
- サトウタツヤ 2004 融合に立ち向かう心理学 学
融, セク融, 国融と心理学 現代のエスプリ,
449, 195-204.
- サトウタツヤ 2005 「科学的」根拠と社会の反応の
関係 科学 (岩波書店) Vol.75,
- 志水宏吉 2001 研究vs実践: 学校の臨床社会学
に向けて 東京大学大学院教育学研究科紀要,
41, 365-378.
- 志水宏吉 2002 学校を「臨床」する: その対象と
方法についての覚書 近藤邦夫・志水宏吉 (編)
- 学校臨床学への招待: 教育現場への臨床的アプ
ローチ (pp.15-48) 京都: 嵯峨野書院
- 下山晴彦 1997 臨床心理学研究の理論と実際 ス
チューデント・アバシー研究を例として 東京
大学出版会
- 杉浦淳吉 2003 環境教育ツールとしての「説得納
得ゲーム」 開発・実践・改良プロセスの検討
シミュレーション&ゲーミング, 13, 3-13.
- 杉浦淳吉 2004 説得納得ゲームによる環境教育と
転用可能性 科学研究費補助金報告書 『環境教
育ツールとしての「説得 納得ゲーム」の開発
に関する社会心理学的研究』 (pp.4-22.)
- 杉山滋郎 2002 科学教育 ほんとうは何が問題
か 金森修・中島秀人 (編) 科学論の現在
(pp117-147) 東京: 勁草書房
- 竹田青嗣 1994 ニーチェ入門 東京: 筑摩書房.
- 宮崎清孝 1998 心理学は実践知をいかにして超え
るか: 研究が実践の場に入るとき 佐伯胖・宮
崎清孝・佐藤学・石黒広昭 (編) 「心理学と教
育実践の間で」 (pp57-102) 東京大学出版
- やまだようこ 1986 モデル構成をめざす現場 (フ
ィールド) 心理学の方法論 愛知淑徳短期大学
研究紀要, 25, 31-50.
- やまだようこ (編) 1997 現場心理学の発想 東
京: 新曜社
- やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編) 2001
カタログ現場^{フィールド}心理学 表現の冒険 東
京: 金子書房
- 山本登志哉・伊藤哲司 (編) 2004 現実に立ち向
かう心理学. 現代のエスプリ, 449.

謝辞: 本論の作成に当たり、国立精神・神経セ
ンターの西條剛央氏からは構造構成主義につい
て、滋賀県立大学の松嶋秀明先生から現場にお
ける共同について、京都大学教育学研究科の湧
井幸子氏からオルタナティブ・ストーリーにつ
いてそれぞれ非常に有益なコメントをいただき
ました。心より感謝いたします。

(2005. 2.17 受理)